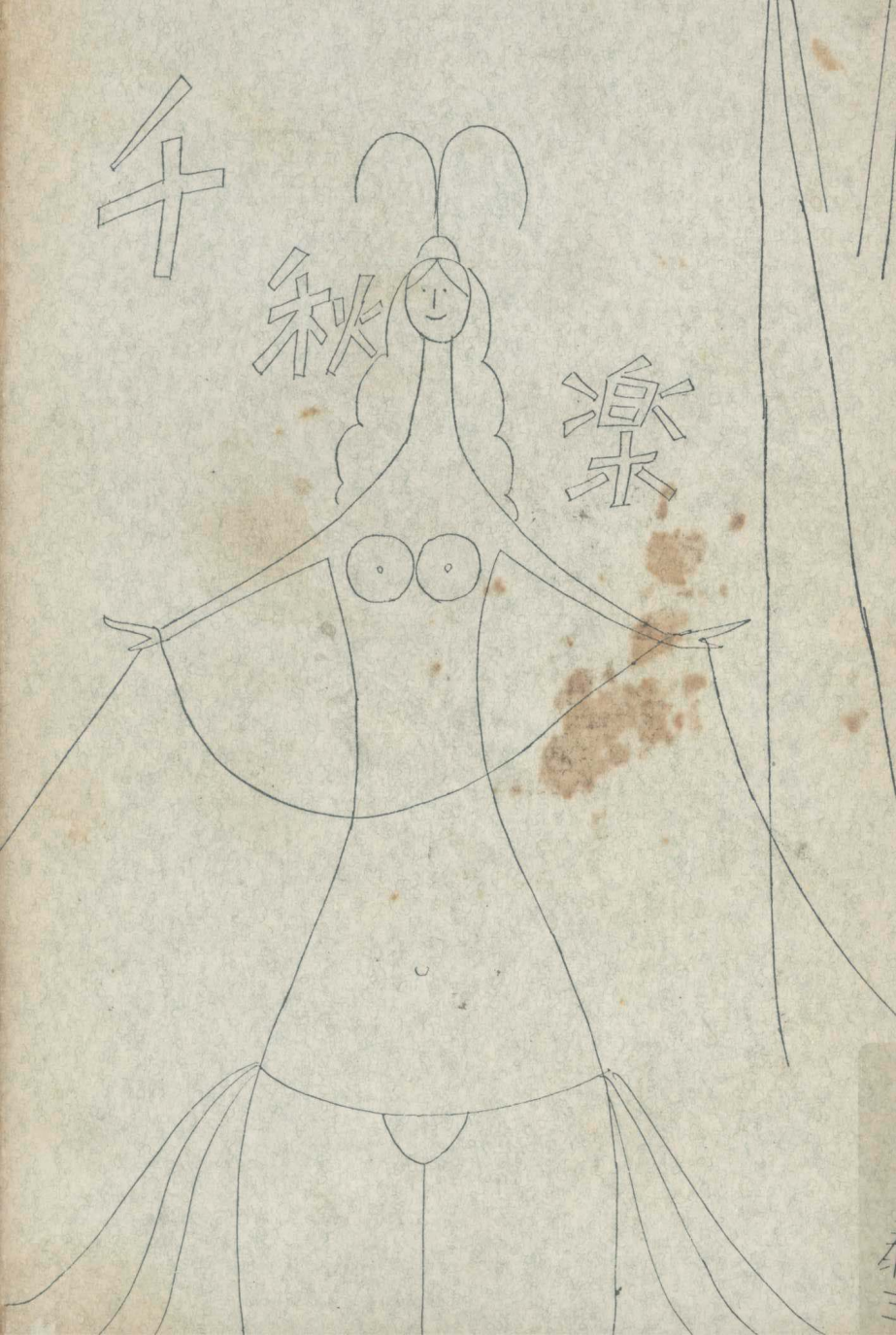
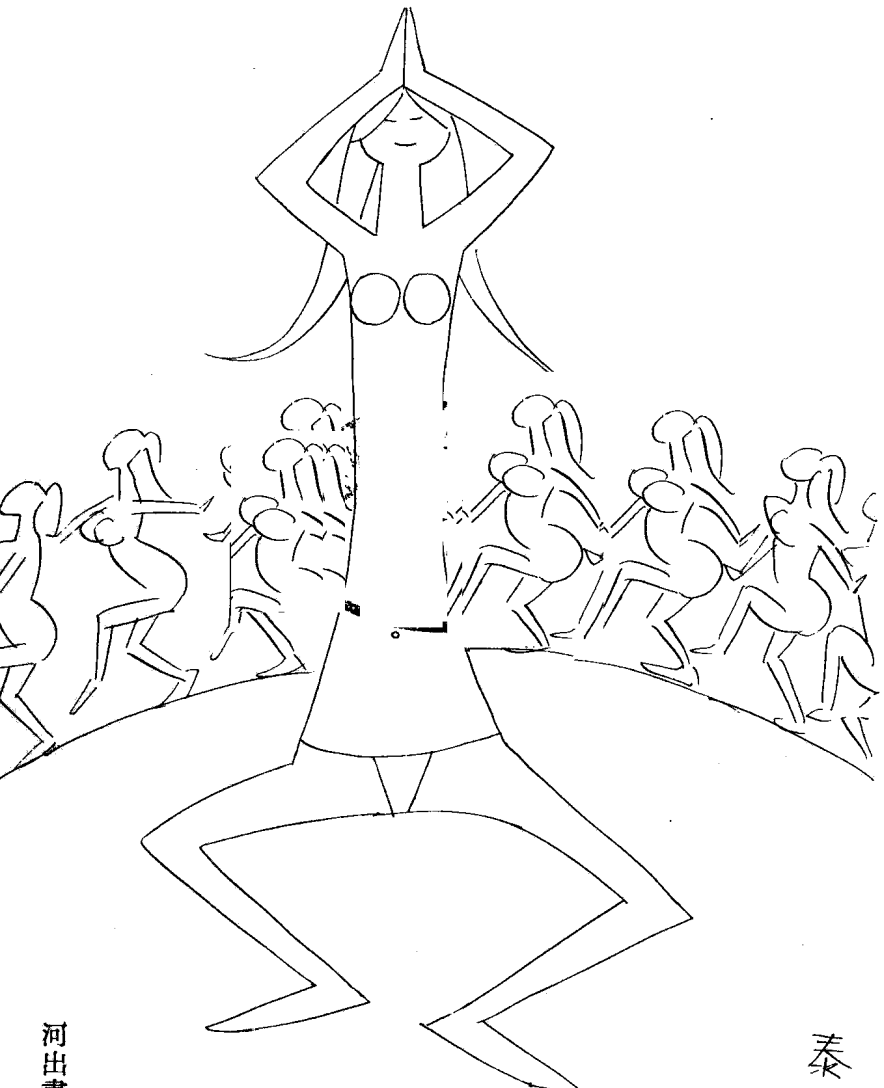

千
秋
楽



河出書房

泰三

千秋楽

定価 四二〇円

昭和三十九年八月二十五日 印刷
昭和三十九年八月 三十 日 発行

著者 深沢七郎
発行者 河出孝雄
印刷者 堀鉄判
発行所 株式会社 河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三の八
振替 東京 一〇八〇二
電話 東京(二九一)三七二一

© 1964 検印廃止

枕経　千秋楽

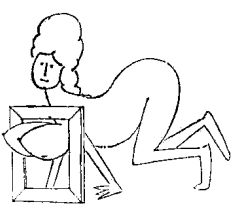
目次

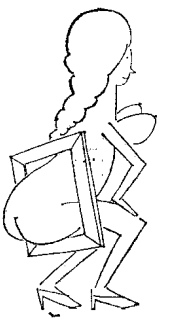
装幀・さしえ・カット　横山泰三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

千秋楽

千秋樂





東京駅の出口から人波を押しのけて急き込んで出てきたが、目の前のビルを見上げて、ドンチョーは、ちょっと立ち止った。このビルの7階の劇場へ馳けつけたのだった。きめられた2時までにはまだ15分も早いのだが、間があるというよりも、これからそこへ行くのに気を落ちつけるためだった。これからそこへ行って、使ってもらう交渉をするのだが、売り込みに来たのではなく電報で呼ばれたのである。だから、ひけめもないのだが、この劇場は芸人たちの檜舞台なので少しおじけているのでもあった。そんな弱味を劇場の人に見抜かれては損なので、ゆっくり、ビルのほうへ近づいて行った。腕をくんで、下を向いて、なんとなく、つまらなそうな恰好をしてエレベーターの前に立った。プーンと、ナフタリンの匂いが、着ている背広から鼻へ突きさすように強いのは、この背広は、さっき、浦和の質屋から出してきたばかりだからである。この半年ばかりは仕事をしていないから、背広も時計も質に入れてしまったが、この電報を見ると、「あそこへ出るなら、洋服を出さなければ」と、おふくろは頼みもしないのにすぐ出してくれたのである。質は、今までおふくろに何回も出して貰ったが、こんどは嫌な顔もしないで、はね上るように「洋服を出してこなけ

れば」と心配してくれたのは、この劇場へ出演することはドンチョーの芸が初めての檜舞台にのることで、それを、おふくろは自分が舞台に立つと同じように思っているからである。

「よかったよ、まにあって。電報見たかい」

エレベーターから降りると、そこの廊下のソファに師匠の奥さんが腰をかけて待っていた。電報をくれたのはこの師匠の奥さんである。

「コレが出来ちゃったんだよ、また」

と、師匠の奥さんは小指を出した。師匠は大阪の劇場へ出ていて、そっちで好きな女が出来てしまったので帰って来ないのである。この劇場へは師匠の芸が買われたのだが、帰っては来ないで、ドンチョーを代役(だいやく)に、という師匠の電報を奥さんは受け取って、奥さんがドンチョーに電報で知らせてくれたのだった。それでも奥さんはまだ心配してくれてここへ来ていたのである。それほど気にかかる大切なこの劇場の仕事だった。

「また、始まったんだよ」

と、奥さんは師匠の女癖の悪いのをボヤきはじめた。そんな女狂いのおかげでドンチョーはこの檜舞台に出られるのだから、奥さんのボヤくのも無理はないが、師匠の悪口を言うのも申しわけないような気がしているのだった。それよりも、自分の芸がどんなにうまいか、それを見てもらうチャンスなのである。

「いいかい、わたしが、大体、話しといたから」

と、奥さんはドンチョーと並んでソファに腰かけているが、寄りかかるようにそばへ寄ってきてドンチョーの耳へささやいた。もう、事務所のほうへは代役の話をつけてくれたらしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「きまったんですか」
と、ドンチョーは念を押して聞いた。
「そうだよオ」
と、奥さんは軽く請け合った。
「そりゃア、だいじょぶだよ、うちのヒトの顔が効くんだよオ」
と、奥さんは、20年も、30年も、この世界に顔を突っ込んできたのだから「顔がきいて」と、鼻を高くしているのだった。奥さんも前は芸人だったが、もう足を洗って、落ちぶれたようなものだが、こんな風に顔が効くことがなんとなくまだこの世界に活躍しているような気がしているらしい。奥さんは一方的に出演をきめているようである。それに、師匠の顔できめたということが自分の力のようにも思い込んでいるらしい。
「しっかりするんだよオ」
と、奥さんが言った。
「やりますよ、やりますよ」
と、ドンチョーは言った。うまく演ることが師匠や奥さんの顔を立てることにもなるのである。それより、まず、自分の芸の絶好のチャンスなので、力の続くかぎりを出す気だった。横の事務所から臙脂の派手なジャンパーの若い青年が顔を出した。
「富田さーん」
「おお」
と、ドンチョーはうなずいた。

臙脂のジャンパーの青年は顎を事務所のほうへ向けた。ドンチョーは事務所へ入って行った。事務所の中は広い板の間で、その板をふめばギシギシ鳴った。ボロ家の中のようだが、上等なソファがずーっと並んでいて、そこには芸人たちが多勢、腰をかけている。

「キミが、富田長次郎」

と、ドンチョーは言われた。

「はア」

と、ドンチョーは答えた。それから、「トミ、チョーだから、ドンチョーと言われています、よろしく」と、頭をさげて自己紹介した。

ドンチョーというのは、ドンチョー役者とかドンチョー芝居とかいう下手な役者の言葉からきたのだが、下手だという呼ばれかたはまた、愛嬌でもあった。

「オレが、演出を手伝ってるんだ」

と、臙脂のジャンパーの青年は挨拶してくれた。

「キミね、あのヒトと打ち合わせしてくれ」

と、臙脂のジャンパーの演出助手は言いながらドンチョーの背中を軽く叩いた。相手はどのヒトか判らないが、ドンチョーがまごついていると、

「ああ、頼むよ」

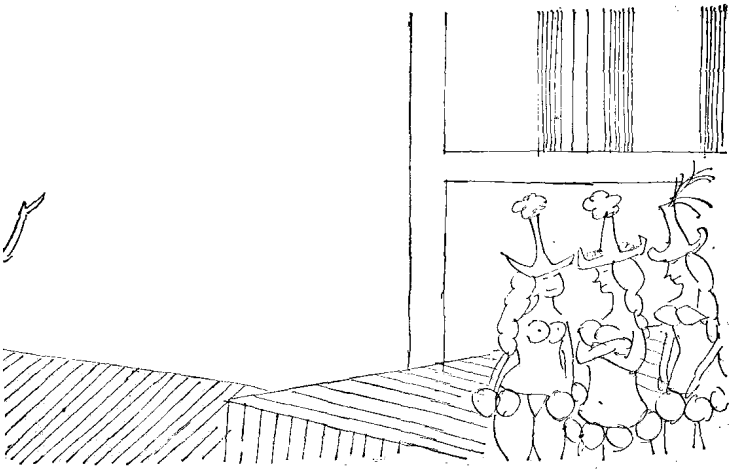
と、むこうで、脚本で手招きをしているのはドンチョーと同じぐらいの年のまだ若い男である。グリーンのセーターで、上等なズボン、上等な黒い靴、金廻りがいいらしい。

「これ、この、クマちゃんだけど」

と、グリーンのセーターの男は言った。ドンチョーの役は熊の役らしい。
「ああ、なんでもやりますから」
と、ドンチョーは途端に、その男に呑まれてしまったようになってしまった。命令されて、それに従ってしまったようである。相手は若いが貫禄があるので、この事務所の係長級らしい。脚本はもらって、家へ帰って読ませて貰うことにきめて、
「これ、いつからですか？」
と聞いてみた。
「いまやってるショウが、今月いっぱいで、次のショウは、来月の3日が初日で、31日の夜から、1日、2日と舞台稽古だが、2日の夜は徹夜でやるから徹夜のあしたが初日だよ」
これで大体の様子は判ったのである。グリーンのセーターの男は続けて、「31日の夜、このショウが終ってから、ちょっと打ち合わせに来てくれよ、稽古は2日の朝、10時からだよ」と言って、これで、今日はすんだのである。男はまた、
「そんなにむずかしく考えなくていいよ、どうせ、ここのショウは、お目当てさんはストリップだから」
と言って、ニヤッと笑った。この劇場はストリップが売りものになっているが、高級なストリップショウである。画家が裸体をかくように生きている女体を芸術的に見せるショウである。ショウだからいろいろな芸人も出演するが、芸人というより芸術家のようなセンスで見せるショウの構成になっているのだった。
「それから、キミ、この劇場（にゃ）、はじめてかい……」

と、ドンチョーは聞かれた。
「ええ」
と、ドンチョーは白状するように言った。この劇場のような檜舞台に今まで出演出来なかった弱味を出してしまうようなものだが、嘘は言えないのである。
「そうかい、それじゃア、いま演ってるショウを見ていけよ」
と、その男は親切に言ってくれた。どんな舞台だか、客になって舞台を見ておけばショウの演りかたも判るのである。
「それじゃア、みせてもらいます」
と、ドンチョーは頭をさげた。お客の目当てはストリップだと言われたが、ストリップよりいま出演している芸人たちの芸をすぐ見たくなった。
「よオー、このヒト、見せてやってくれよ」
と、その男は、また言ってくれた。
「うん」
と、さっきの臙脂の演出助手がうなずいた。が、何か、ほかの打ち合わせをしていて忙しいらしい。
「外にいます」
と、ドンチョーは言って廊下へ出た。事務所の中は芸人たちの打ち合わせでざわめいているから、用事がすめば早く出たほうがいいのである。
「あら、もうすんだのかい」
と、師匠の奥さんはまだソファに腰かけて待っていてくれた。

「ええ」
と、ドンチョーは言った。
「じゃ、帰ろうか」
と、奥さんは言った。
「いま演ってるショウを見てゆけと言われたから」
「そうかい、そりゃ、見といたほうがいいよ」
と、奥さんはすぐ帰ってしまうらしい。
「じゃ」
と、ドンチョーは手を振って奥さんに合図した。
「しっかり、がんばるんだよ、見に来るから」
と、奥さんはまだ心配している。
「おい、来いよ」
と、事務所から演出助手が出てきて言った。それから、「見て行きますか?」と、奥さんにも言った。
「悪いわねえ、私も見せてもらおうか」
と、奥さんが言った。それから、「ほんとに、よろしくお願いします、この子を」と、ぐーっと低く頭をさげた。
「うん、うん」
と、演出助手は軽くうなずいた。劇場の入口にまわると、「千秋楽祭り(フェスティバル)」と大きく書いてある新



しい看板が出ている。
「じゃ、どうぞ」
そう言って、演出助手は客席へ案内してくれて引き返した。
「あ、いけねえ、脚本をもらうのを忘れた」
と、ドンチョーはさっきの自分の役の脚本を貰うことを思いだした。あわてて事務所へ引き返すと、さっきのグリーンのセーターの男はまだ打ち合わせをしていた。
「あの、さっきは」
と、ドンチョーは挨拶をして、「脚本をもらいたいのですが」と言うと、
「脚本なんかないよ、脚本の必要なんかないよ、キミの演るところはすぐ判るから。脚本が足りないんだ、セリフの多い役だけしか持ってないんだ」
と言うのである。
「ああ、そうですか」
そう言ってすぐホールへ引き返した。ドンチョーは顔をひっぱたかれたようだった。脚本がいら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c